

# 西東京市 公民館だより

田無公民館  
南町5-6-11  
TEL 461-1170  
芝久保公民館  
芝久保町5-4-48  
TEL 461-9825  
谷戸公民館  
谷戸町1-17-2  
TEL 421-3855

保谷公民館  
柳沢1-15-1  
TEL 464-8211  
住吉公民館  
住吉町6-1-25  
TEL 421-1125  
ひばりが丘公民館  
ひばりが丘2-3-4  
TEL 424-3011

## 中高生を 市民として歓迎する場を

青少年がサークル活動、ロビーでの勉強などで公民館を利用する姿がみられます。地域社会は彼らをよく支えらるべきです。公民館運営審議会委員で社会教育研究者の萩原建次郎さんに原稿を寄せていただきました。

### ★各地の青少年施設の取り組み

中高生を中心とする若者の居場所づくりをいかに支援するか。この十年、思春期から社会に巣立つまでの若者層に対して、正面から支援していく青少年施設が全国各地に増えてきました。代表的なのが、杉並区の児童青少年センター「ゆつ杉並」、岩手県奥州市の「ホワイトキャンパス」、横浜市の青少年交流センター「ふりーふらっと野毛山」、京都市の青少年活動センター、札幌市の青少年センターといっただけです。

こうした施設は新たに建てられたところもあれば、既存の施設をリフォームして再スタートしたところもあります。ゆつ杉並やホワイトキャンパスなどは、高校生自身が施設的设计やリフォームの段階から参画し、オープン後も、運営委員会をつくって、運営の中心的役割を担っています。若者の居場所づくりを若者が参画しながら、大人と共に進めていく仕掛けがそこにあるのです。

また、横浜市や京都市、札幌市などは、かつての勤労青少年ホームの運営理念や方法を見直し、職員体制を大きく変えることで、多くの若者たちが日常的に利用する施設へと変貌しました。この職員は、口頭からやってくる中高生たちと直接的に力がかかりながら、彼らの声に耳を傾け、隠れた思いをくみ取りながら、事業を展開しているのが特徴的です。二十代から六十代までの職員がかかわり、ときには社会的親兄弟・おじおばとして、多様な顔と役割を求められつつ、若者の同行者となって接しています。

### ★青少年の居場所としての公民館

実は一見新しく見えるこうした取り組みも、もとは公民館がモデルとなっているのです。それは一九八二年に開館した枚方市の楠葉公民館です。現在は楠葉生涯学習市民センターとなっていますが、この初代館長だった渡辺義彦さんが職員と共に、どんな人でも排除しないという思いをもつて、老若男女の市民が自由に集える場にしました。そこには学校帰りの中高生たちも含まれていました。事務室も学校の職員室さながら、子どもたちや若者たちが入ってきて、若い職員とおしゃべりしたり、ロビーでくつろいだりしていました。地元「やんちゃ」といわれる手に負えない子達にも声をかけ、顔の見える関係づくりを行っていたのです。また、小学生から利用登録ができ、自分たちで音楽室、録音室、図書コーナー、和

室などで思い思いの文化学習活動をするのが許されたのです。公民館という多様な大人がいる中で、若者たちの成長を見守り、一市民として歓迎する空間をつくっているのです。このように、若者たちの居場所の提供は、公民館が先んじていたことについていいます。

現在、この取り組みを参考に京都では「どんな若者も排除しない」という原則でかわり、横浜でも京都の取り組みからも学びながら、若者の居場所づくりを取り組んでいます。こうした思春期以降の若者たちへの地域活動支援、居場所づくりは、その必要性が以前から指摘されていながら、なかなか手をつけられていない重要課題です。そもそも、こうした場がなぜ必要なのでしょか。

### ★地域に「中間的な場」を

中高生頃から親からの自立

心や独立心が強くなり、大人のまなざしから離れたところで自分たちの時間・空間・仲間を持つようになる年代になります。自分の力で何かをやりとげてみたいという思いをもちながら、どうしていいかわからず、もどかしさを抱え込む時期でもあります。大人への甘えと反発、独立心と依存心、他者への信頼と不信のあいだで揺れつつ、より広い社会へと目が向き始める時期です。大人にすれば、相反する側面をいくつも抱え込んだ「若者」という存在は、ときに自分の価値観に揺さぶりをかけ、やっかいな存在にも映ります。

けれども、これは一人前になつていくために、自立に向けて本格的にもがきはじめて証ではないでしょか。かつては、一人前になるための仕掛けとして、若者組・青年会といった組織が地域にありました。そこで

織が地域にありました。そこでは地域の大人やお兄さんお姉さんたちとかわり、社会規範を身につけたり、社会生活に必要な知恵や技術を学び、経験を積んでいました。いきなり実社会にでるのではなく、地域の中に同行する大人たち、先輩たちがいて、徐々に社会参加と参画の経験を積んでいってました。

そうした公共の場と私的な場のあいだをつなぐ、中間的な場が豊かに仕掛けられていたからこそ、子どもと大人のあいだで揺れ動く若者が、責任ある一人前の大人へと成長をこげられていったわけです。

現在、地域社会にそうした場や仕掛けがあるでしょか。高度経済成長期以降、地域が機能的な空間へと変貌し、縁側の空間、親元から少し離れた共同生活空間といった、公と私をつなぐ中間的な空間や場がなくなっ

てきました。一方、子ども・若者にとつて、地域は学校と塾、家との三箇所を結ぶ「通り道」と化しています。

中間的な空間や場がもてなくなれば、行き場を求めて街でさまよつたか、自室に引きこもり、インターネットやケータイメールといったメディアの世界に依存する傾向が大きくなって当然です。街でたまたま煙たがられ、地域の施設で何かをしようにも制限される。大人の側も若者たちと直接的なかわりの機会が減れば、彼らの異質さばかりが気になり、好奇な視線ばかりが増幅してしまつていこう。

こうした悪循環を断ち切り、若者も責任ある一人の市民として成長していくために、彼ら彼女らを歓迎する場が何より必要なのです。

萩原建次郎  
(公民館運営審議会委員)

## サークル訪問 あや綾の会



作品を囲んで  
★4面にも作品を掲載しています。

「ベテラン主婦ばかりなので、会話の中で生活の知恵を吸収できるのが、とても楽しい。」

「綾の会」は、平成18年10月に行われた住吉公民館の主催講座「衣類・ハギレを楽しくリフォーム」が母体となり、同年11月に誕生したサークルです。

講座ではリフォーム専科の講師の指導を受けていましたが、サークルでは、お互いが講師となり、毎月第三木曜日の午後、活動しています。会員は現在11人。常時活動しているのは、8人の60代から70代の女性です。昔着用していた思い出のスカーフから生まれた大きめのシヨルターバッグ、新聞紙のカラー刷りの部分をつまみ利用して作った「サーージュ、ハギレや着物から帽子やベストやネズミの眼鏡ケース、テーブルクロスやタオルから草履、ペットボトルと紙粘土で作った小物入れ、百円ショップの毛糸から生まれた手ほつきや室内履き等々…。どれもビックリするほどお洒落に生まれ変わっていました。

「サークルの発足当時は、どうなることかと心配もありましたけど、こうして、同じ材料でもまったくちがうものが出来上がり、廃品から世界に一つしかないアイデアが生まれることは、本当に素敵なことだと思つた。今はとても満足しています」と代表の三森さん。

ここには、今世界中で見直されている「もったいない」の精神が存在し、「物を大切にすることを」や「生活の知恵」が溢れています。

仲間と共に「廃品」から「新たな夢」を生み出す作業を実行している皆さんは、まさに暮らしの中の「真の豊かさ」を実現しているのかもしれない。

連絡先 三森 422・4145